

心の音

馬場駿

一

舗装路を斑にしてみせている樹木の影が大きく揺れている。まだ濃い鼠色のそれも昼中には紫が混ざり、陽の当たるところとの明暗の差も驚く程に大きくなるに違いない。朝聴いた天気予報によれば今日は真夏並みに暑くなるという。梅雨の長雨が育てすぎた沿道の木の枝葉や雑草が、南からの風を受けて、もつとアクセルを踏めと言わんばかりに志津をあおった。時速八十キロ、いままで一度も出したことがないスピードに挑む。左小回りで側溝近くに擦り寄ると、タイヤが路上の木の

実や枯れ枝を押し潰すのであろう。ピキピキと不気味な音がした。

夫の猛雄と何を言い争ったのかを正確に思い出そうとしたが、限りなく迫ってくるカーブに対応し、ハンドル操作を繰り返しているうちにそれ自体どうでもよくなつた。その代わりに、命の意味や価値への疑問が急に志津の中に湧いて出た。たとえばたったいま、反対車線を走り来る黄色いカーブカーに向けて自車のハンドルをきり正面衝突をしたら、シートベルトはしているが私も相手も即死だろう。わざとではなく技量不足や過失でも結論は同じだ。それほど危険な瞬間を、何時間後かは分からないが家に帰るまで何十回何百回と経験する。しかしこのドライブに命を賭けるほどの意味がないことなど百も承知の私なのだ。猛雄たち男はどうか。仕事は車をはじめ高速道路交通機関を利用しなくては不可能だから、この身の危険を日常的に経験していることになる。家にいる女はそれだけでも感謝すべきなのかもしれない。「あつ」と志津は急に口喧嘩のきっかけを思い出

した。「おふくろの嫌味が悔しかったら、妊娠して産んでみるよ、言っておくが俺の子種はちゃんとしてるからな」

子供の産めない女は価値がないと志津に向かって言い放った姑を、今朝方非難したときの猛雄の台詞だ。

胸の動悸が激しくなり、志津は、「野鳥の森」の看板を目にして車を寄せ、息苦しさを逃れるようにして車外に出た。目の前の木の枝に白い尾を振る小鳥がいて小首を傾げた。

「車を置いていってやるから、ここめの湯にでも浸かって来い。俺のせいだって言いたいなら他の男と寝て、試してきてもかまわないんだぞ」

思い出したとたん心が再び震え始めた。子込めは懐妊のこと、猛雄に言われなくとも三年程前から一と月おきぐらいには通っている。藁をもつかむ気持ちからだ。

「お湯に浸かって本当にその場で妊娠してはたまらないでしょう？ あなたの協力がいるわ」

かつて、性生活がお世辞にも濃密とはいえない

ことを皮肉って志津が言った。だから猛雄は今回仇をとったことになる。二十七と十九で、八つ違いの末広がりと周囲に祝福されて同棲を始めた二十年前には、紛れもなく愛があったと志津は思う。それなのに、いや、そうだからか、二人は子どもを授からなかった。

「いつまでも二人は、いつかは一人」標語のような、呪文にも似た姑の言葉が重くのしかかってくる。猛雄は淡野家の一人息子、跡取りができないのは志津が考えている以上に一大事なのに違いない。

「女は出産するだけの機械かき」

志津はドアを勢いよく閉め、ゆっくりとルートに戻ると、若者のようにタイヤを鳴らして急加速をした。左右の緑が恐ろしい速さで後へと飛んでいき、センターラインがクネクネしながら生き物のように襲ってくる。志津は半ば笑いながら、つまらないことに命を賭けている自分を「バカだ、バカだ」と罵り続けた。

熱海峠の手前で、目に飛び込んできた一幅の絵

画。残雪の白い立て縞を配した薄墨色の富士がたなびく無彩色の雲の上にはつきりと顔を出している。志津は思わず歓声をあげてスピードを落とした。しかしそれも束の間、ガスの中に入りこみ、視界数十メートルという乳白色の闇に囲まれている。

猛雄にプロポーズされたのは、やはり富士の見える乙女峠の茶屋で、当時志津の目に映る猛雄は、一点の曇りもない澄んだ大空であり、はたまた雄大な富士そのものだった。嫁、姑の間で姑息に立ち回ったり、日常の瑣末なことではいちいち嫌味を言うようなちっぽけな人間ではなかった。すくなくとも志津はそう思いたい。そうでなければ、唯一の男として、生涯の伴侶として猛雄を選んではまった自分が惨めすぎる。反面、そうだとすれば現在の猛雄を創ってしまったのは自分ではないかという疑いが生じる。哀しいかな即座に否定できる強さも凶々しさも持ち合わせていない。しかも長期間にわたって専業主婦でいた分、一人で生きていく力は極限まで弱っている。自活でき

ないから妻のままにいる、暦だけをめぐっている、そうならあまりにも哀しい。

茫漠としたこの白い闇そのままだ。志津は自嘲した。暗くないのに不安が募る。走っているそこだけは見えるのに遥か行く手が見えない。「まるでわたしの人生みたい」志津は目を懲らしながらつぶやいた。

そして、この遅々とした歩みに耐えられなくなったときは全てを失う……そんなふうにも思う。

大観山から椿ラインを下り、奥湯河原經由で観光会館に着いた。まだ十時を少ししか回っていない。いつものように万葉公園の散策路の入口に立つ。そこまでは判で押したように変らない流れだった。

「地元の方かねえ？」と後から声をかけられて振り返ると、いかにも土の匂いのするような、三人の年配の女性が立っていた。

「いえ、わたしも観光客の一人です、ごめんなさい」

謝る必要もないのだが、たぶん名所に関する質問か、どこか目的地までの道をきかれるのだろうと思ひ、先手をとった。

「あじさいはどこじやる？」

老婆も老婆なりにめげない。聞きたいことは聞く主義らしい。紫陽花といえ、いまも通ってきた椿ラインかあじさいの郷だが、彼女たちにガイドするほどの知識も道案内する自信も、志津にはなかった。結局ごめんなさいを貰き、急ぎ足で散策路を進んだ。観光地の人間としては大いに失格である。背中に三人の非難めいた視線を感じた。

溪流をいたたく森林、庭園には一つの特色がある。それは広範囲に亘る美しい苔の存在だ。万葉公園は、千歳川の溪流に接する自然公園、蘚苔類をはぐくむ適当な湿気にはことかかない。滝の傍の自然石はもとよりのこと、それは、木の幹を覆い、路面に敷かれ、崖の花崗岩を装って落ち着かせている。

志津は、朝からずっと引きずってきた重い気分を一掃し、数十種類の緑色の中でひととき輝くモ

スグリーンに囲まれて、ようやく癒されていった。

そのとき……

「たゞひとり湯河原に来て既に亡き独歩を思ふ秋の夕暮れ。この歌ね、詠み人の吉井勇が僕で、独歩があなたとすると、ちょうどこの通りなんだ」
急にも静かな調子で、男の声がそう言った。

「僕の人生は早々と秋だし」

志津はゆっくりと振り返り声の主を見付けると、何度も瞬いた。長身で、長袖をたくしあげ、黒いウエストバッグを着けている。顔は細面、七三に流すように分けた髪、淡い色のサングラスが若者風である。

「もつともこうしてあなたは生きていて、びつくりして、こいつは誰だろうと警戒むきだしのドングリ眼」と男がほほえむ。白い歯が形よく並んでいてきれいだった。「あの……」と志津はたまりかねて「どちらさまでしたでしょうか？」と聞いた。

「やっぱり僕って印象薄いなあ。二カ月前、椿ラ

イン、脱輪、携帯電話。これでも？」

「あーっ、ご、ごめんなさい、なんてことでしょ、わたし、すっかり失礼しちゃって」

志津は頬を真っ赤にして、深々と頭を下げた。

その日も椿ラインを快調に下っていた。葉桜の狭間を、コロコロと笑い合う少女たちの明るさを思わせる若葉の中を……その浮かれた気持ちで運転に隙を作ったらしく、ハンドル操作を過って左の後輪を側溝に落とす。女一人の力と知恵ではどうなるものでもなく、数台の乗用車に手を挙げては救いを求めたが、無理だと思ふのか車を停めて助けてくれる者は一人もいなかった。あきらめて傾いた車のシートに身を沈めたとき、迂闊にも涙が流れた。男ならこういった場合の処し方にも慣れていようし、携帯電話を駆使する若者なら業者に連絡するなりして造作もなく危機を脱するであろうに。志津は自分の無力さをいやというほど思い知らされた。

「これは助けたくても無理だ」とウインドウの隙

間から男の声が入ってきた。やっと停まってくれた人がいる、とホッとして志津が外へ出ると、

「その顔じゃあ、連絡済みの業者待ちって訳でもなさそうだ」と顔を不躰に覗き込まれた。

「え、ええ。どうしたらいいか、途方に暮れてます」

「地元の人？」

「伊東です。これから万葉公園にと……」

男は聞いているのかいないのか、親指を器用に動かして携帯電話のボタンを押し始めた。

「おう、俺、金田。知り合いの車、脱輪してさ」

あ。面倒見てやって。俺は連れがいるんでお前待つてはいられないけど、頼む。場所は城山入口から奥湯河原へ向う下り車線。上品な美人が傾いた車の傍にいたらそこが現場。え、名前？」そこまで喋りまくると志津の顔を見た。

「淡野志津と申します」

「アワノさんだそうだが、じゃ。そうそう、二十分もあれば来られるよな？ はい、よろしく。近いうち呑もうな」

男は携帯電話を折り曲げて懐にしまうと、志津の全身を眺めながら自分の車へと後退りしだした。

「あの、何とお礼を申し上げていいやら」

「お礼なら、助けにくる髭面のダチにして。俺は何にもしてないんだし」

笑顔が爽やかであった。道端に落ちている吸い殻を拾って、そっとハンケチにくるみ自分のポケットに入れて何事もなかったように立ち去る、そんな感じのさり気なさに胸を打たれた。

リクライニングを倒していたが、助手席にいたのは女性らしかった。車を見送りながら、志津は自分の胸の中に小さな嫉妬が生れそうなのを必死で抑え込んだ。

男の住所は金田の友人に聞き、後日礼状をしたためている。「貝などのこぼれしごとく我が足の爪の光れる昼の湯の底（岡本かの子『かるきねたみ』より）」という和歌を引いて書き始め、なぜ万葉公園を定期的にたずね、ここめの湯に浸かるのかはさすがに書けなかったが、岩風呂が好きな

こと、休館明けを狙っていくこと、ルートがいつも一緒なのは方向音痴なので別の道が恐いことなど、とりとめのないことを書いた。そして、趣味で作っている手書きの葉を添え、舌で糊をなめて封をした。投函する前に読みなおし、一度ならず躊躇したほど内容は少女趣味に満ちていた。明らかに、携帯電話の男に、恋に恋するようには無防備に憧れたのだ。それは長い間封印されていた志津の女としてのときめきだったかもしれない。

その金田がいま、志津の目の前にいる。

志津は、吉井勇について笑顔で語っている金田の背後から急に、あの日の車の中の女が初めて顔を見せ、怒鳴り出すような気がして落ち着かなかった。

「この人、吉井勇ね、かなり相聞歌が多いんです。とくに僕が好きなのは歌集『酒ほがひ』のなかの一首で『君見ずとかたく誓ひて来しものをもの狂おしやまた君を見る』。いまの僕も同じです」

ここまで言われて動揺しない女はいないだろう。

志津はここでようやく気がついた。金田が今回、俺を僕に変えていることを。よく見せたいというのが動機なら、本当に自分に好意を寄せているのかもしれない。

金田の目が志津の目をとらえた。

息苦しくなった。

「あの、きょうお連れは？」

たまらずに志津は直截的な聞き方をしてしまった。胸の内が丸見えではないか。恥ずかしさで心怦が早鐘のようになった。

「仕事の途中です、これでも」

「お仕事……」

「ええ、ほら後には誰もいません」と金田はスペインのマタドールよろしく身をひるがえしてみせた。気障にも見えるその仕種がまた妙に様になる男だった。

「営業なので比較的自由になるんです」とこちらの疑問を先取りしたりもする。

先程紫陽花について聞いてきた三人組が、一步を踏みしめる用にしてこちらに向ってきた。

志津は、道を開けるため、自然に金田に寄り添う形になった。すれ違いざまの老婆たちの好奇の目が刺すように痛い。そのとき金田の右手が志津の腰に優しく触れた。いやらしさなど微塵も感じさせないもので、志津の姿勢をバランス良く保たせるための配慮に違いないとは思ったが、それでも、密かに懂れたほどの男の厚意である、嬉しくないはずはなく、心にも体の中にも熱いものが籠もった。そうなればまた、そういう女の部分を疎ましくも汚らわしくも思う「自分」が育っていく。

「あの、お仕事でお忙しいでしょうから失礼します、わたし、子どもを欲しがっている主人の希望に添えるように、願掛けのつもりでここめの湯に来てますの」

とうとう言ってしまった。これで、男の自分に対する或る種の興味は失われるはずだと志津は思った。これ以上二人の発展はない、女の言葉をそ

う解釈するのが分別のある大人というものだ。

志津は金田の言葉を待たずに、白い敷石の路を登り、ごこめの湯をめざし始めた。体を触られて怒ったと思われるのが一番いい。また、金田がそう思えるタイミングでなければ不自然になり失礼になる。そうも思った。

「またここで、いつか、ほんとうにいつか、お会いしましょうね、いいでしょう？」 志津さん、志津さん！」

名前を呼ばれたところで一瞬足が止まった。ほんの一時間か二時間デートをしたところで何が悪いというのか、誰に知られるというのか。しかし志津にはそれだけで終らせる自信はなかった。

湯に身を沈めると、心なしか落ち着きが戻ってきた。やや抑えた照明と、ほとんど無彩色な石と岩で造られているせいだろうか。無色透明の温泉の中で手足を伸ばして見つめてみる。ふと気づくと、裸の志津もまた白と黒の無彩色であった。化粧らしい化粧はしない。「それが一番志津らしく

て好きだ」と結婚当初猛雄に言われて以来だが、いまはもう猛雄の興味は別の女に向いている。夫婦を空気のようにしたのは限りなく長い二人の間だ。心が先に離れるのか、それとも肉体か。いずれにせよそれはときめきが無くなった時期と符合しそうだ。金田の言葉は熱かった。それを受けた身体の火照りを湯で冷ましているほどに。

志津は立って露天風呂に出た。金田がいまのいま吸っている空気とつながりたかったのかもしれない。来年は四十の声を聞く。しかし湯に映る志津の裸体はまだ十分過ぎるほどに女であった。

温泉に浸かり岩にもたれ目を細めて仰ぐと楓の葉が見えた。陽を直接に受けて若葉のよう、重なりあつて深緑のよう、さらに風にくれ葉裏を輝かして金属のよう……志津は究極の静けさの中で、いつしか睡魔に襲われ始めた。

二

実を言えば、夫の猛雄が何で稼いでいるのか詳

しくは知らない。いつだったか、近所の人に質問されて正直にそう言ったところ、「バカにしないで」と叱られ、それ以来口をきいてもらっていない。妻が夫の職業を知らないということが、それほどに非常識な、考えられないことだ、ということなのだろう。しかしその通りなのだから仕方がない。家計という側面から夫をみれば申し分がなかった。普通口座には常に、何もしなくても一年は一家三人が生活していけるだけの預金残高があったし、夫関係の冠婚葬祭費はそこからは出さず、猛雄本人がどこからか捻出してきて賄っていた。悩みといえば、姑との性格の不一致と子どもができないことぐらい。そう言われても否定はしない。しかし心と心をとまでは望まないが、性器を合わせるという物理的努力さえいまの夫には無い。が、これもまた、どこにでもある夫婦の有り様なのだろう。

「おい志津、車を使いたいときは三日前までに言えって言ったろ。何だ急にこごめの湯だなんて、きょうの商談の相手は車無しで行ける場所に住ん

じやないんだ、あきらめろ。だいいちおふくろは検査入院、誰がここを守るんだ。先月の二十六日にいったばかりじゃないか、わがままが過ぎるぞ」と猛雄がネクタイをウインザーノットで結びながらまくしたてた。

今日六日は偶数日、岩と石の風呂が女湯になる。何の約束もないのだが、行けば金田に会えそうな気がする。うっかり「行きたい」と言ってから心を探ると、そんな答えが返ってきた。それだけに、いとも簡単に断られて志津は少しばかり頭に来た。

「三日前にお願いとすると、当日必ず泊り込みのお仕事になるんでしたわね」

変ではないかと志津は常々思っていた。車がなから外泊、なのではなく、車がないことを口実に外泊を正当化しているのだ。志津が湯河原にいく当日とその翌日の丸二日、猛雄はたぶん女の所に居続ける、そう、正々堂々と、恩着せがましく……しかし夫婦としての本質的な問題はむしろ、そうと分かっただけで、さして波立たない自分

の心であろう。それは志津をいっそう哀しくさせた。

気がつくつと、頭のとっぺんが燃えるように痛い。猛雄にしたたかぶたれたらしい。虚ろな目で、かつて愛した男の顔を見ると、唇の縁に白い泡をつけて何か怒鳴っている。幸いなことに何も聞こえなかった。

わたしが出ていけばそれで終わり。わたしに勇気があればそれが始まり。志津はその二つを呪文のように唱えながら猛雄を静かに送り出した。

十分も応接間のソファで横になっただろうか、ドアチャイムの音に起こされ、志津は重い頭を何度も振りながら玄関に出た。

「淡野志津さんですね」

警察手帳を突き出して、丸顔で不精髭の、どちらかという漁師のような感じの男が言った。

「はい、主人はたっただいま勤めにでしたが、何か」

志津は反射的に猛雄が何かしでかしたのではと思っただ。

男は笑って「ぼくもそれを見届けてからチャイムしたので、知っています」

「はあ」頭がズキズキしているのも手伝って志津は、事態が全く呑み込めない。

「とりあえず任意で事情をうかがいたいというところで、ま、いたずらにご家庭の円満を壊すのは本意ではありませんし、それでお一人になるのを待っていたと、こういう訳です」

「すみません、お話の趣旨が良く……」

「弱りましたな、おーい、裏はもういいからこっちへ来いや。少なくとも逃げるようなタイプの奥さんじゃないって」

志津は啞然とした。目の前の刑事の目当ては自分だったのだ。

あらかじめ裏口を固めていたのであろう、比較的若い刑事が家の角から顔を出した。

刑事が容疑者を取り調べる、そんな場面はテレビドラマの中で見るだけのものと誰もが思っているはず……取調室に一人、ぼつねんと椅子に腰掛

けながら志津は、あの金田俊一に対する業務上過失致傷と保護責任者遺棄の容疑で、自分が現実にドラマの主人公にされている不思議さを嘔み締めていた。

急に二人の刑事が部屋を出ていくのも何かおどまりの儀式であるらしい。責められたあとで独りになると、あることないこと何でも自白するともいうのだろうか。自宅での任意の事情聴取から警察署での取調に切り替わった最大の理由はアリバイがなかったことらしい。事件の起きた七月四日は、たった二日前のことだ、しっかりと二十四時間を丸ごと思い出せる。いつもなら近所のスーパーマーケットや八百屋に買物に出掛けるので、顔馴染みの店員の幾人かと会話を交わして、それがアリバイにつながるのだが、この日は冷蔵庫の残り物で三食を賄うつもりでいたから家の中に籠もっていた。しかも猛雄は早朝から仕事で不在、姑はポリープがでたことから検査入院中でこれも不在、要するに志津自身しか志津のその日の行動を証明する人間がいなかったのだ。当初、語

るに落ちるのを待つ取調手法なのか、容疑の内容すら口にしなかった刑事も、あまりにも鈍感な志津の反応については焦れて、当日の事件の内容に触れてきた。丸顔の方、羽月と名乗る刑事が直接の尋問者だった。

刑事の尋問から事件の概要は把握できた。なにしろ三時間も同じ問答を繰り返したのだから。七月四日午前十一時半頃、椿ラインの城山入口より大観山寄りの路上で、東京からドライブに来た中年夫婦によってそれは発見され警察に通報がなされた。ガードレールの端に左前照灯を食い込ませた乗用車の助手席に、頭部を強打し額から血を流した金田の姿があったという。一旦ゆっくりと通り越したものの、蜘蛛の巣状にヒビが入ったフロントガラスを見て事故だと確信してバックしたという。運転席にはそのときすでに誰もいなかったらしい。被害者の金田はそのときからずっと意識不明のまま回復していない。ということは被害者本人から事情を聴取していないということになる。そのはずだ、金田に意識があれば間違っても

自分を犯人に仕立てるはずがない。志津はそう思った。しかしそうなら何故疑われたのか、とそれ自体が不思議になる。金田俊一と自分を結ぶものは二回の偶然の出会いそして礼状とその返信、それだけなのだ。刑事はそれを嘘だと言ひ張る。

四月二十四日、脱輪の処理をしてもらつてから六月二十六日に万葉公園で会うまでの間に、何回かデートを重ねていて、当然肉体関係にまで発展しているはずだ、として譲らないのだ。その根拠は何？ 志津は静かな口調ながらその呈示を求めて食ひ下がった。刑事たちが部屋から出ていったのはその直後である。

志津は腕時計を見た。すでに三十分が経過している。カチャリと音がして羽月刑事ともう一人の若い刑事が、出ていったときと寸分違わぬ顔付きで入ってきた。そして若者は坐り、丸顔は檻の中の熊よろしく室内をウロウロとした。

「おい、そろそろいくか」と熊が言った。

若い刑事がビニール袋に入った葉を、掌で伸ばす様にして志津の前に出した。

「事故車にあつたんだその葉。それに付いてた指紋とさつき採つた指紋が一致した。運転していたのは奥さん、あなただよね」

「葉はお礼状と一緒に郵便で送つたものです。わたしの手作りですから当然わたしの指紋は付いていると思ひますけど。それとも事故車にわたしの指紋でもあつたのですか」

志津は表情も変えずに言った。

「革手袋でもしていたんじゃないのかね。常識の部類だよ、何かやる気なら」

「事故つておっしゃつたばかりですよ」

「奥さん……」と言つた後の間が長い。

「はい？」まつたく身に覚えがないというのは強いはずだ、と志津は落ち着いて、穏やかな顔を羽月刑事に向けた。

「観光会館の駐車場ねえ、車のキー、預けますよね？」

「え、ええ」

「そのとき車のナンバー告げるでしょ、係の人」

「はい、確かに」それが何だと言うのか。

「二十六日の日、三人のオバさんに会いませんでしたか？ 被害者と一緒に万葉公園の独歩の湯に行く途中の散策路で」

「ええ、その前に紫陽花についても聞かれていますし、憶えています」

「その三人も実は車で来てましてね。それが口を揃えて言ったそうです、あなたと被害者は男と女の関係に間違いないと。偶然の出会いなんてムードじゃなかったとね」

志津はあきれて首を横に振った。

「あなたも運が悪い。ナンバープレートの下の数値だけでいいのに、オバさん紙に全部書き写して係に渡したんだな、これが」

確かに志津のときは言われるままに大きな数字だけを申告している。

「ま、あなたほどの美人だ、年配とは言ってもオバさんたちも女性、ジェラシーも手伝って強烈な印象を受けたんでしょ。どうです、浮気してたんでしょ？ 被害者と。別れ話、痴話喧嘩、そ

れとも旦那さんにばらすとかいって脅された？

もう言ってしまったらどうかね、真実つてやつを。警察はねえ、奥さん、事故じゃないって見方も捨てちゃいないんです」

女性……と、志津はそこで引掛かった。刑事は、志津のことをモーターズの主任から聞いたと言っていた、あの日脱輪した車をミニクレーン車で引き上げてくれた男で金田の呑み友だちだ。しかし刑事は、志津が金田に出した手紙の内容を予め知っていた。金田自身が警察に手渡すことはいのだからそこには誰かがいる。

「あいつ、三十八で独身、しかも一DKマンションに一人暮らしでしょ、酒呑むよりほか暇のつぶしようがないんじゃないかな。あのルックスでそこそこ教養あるし、女にやもてますよ、確かに、ええ」

料金の他にお礼をはずむと、男は金田に関する情報を分けてくれた。そうか、一人暮らしの男には必ず女がいると発想すべきなのだ。志津は自分の鈍さに腹がたった。

「刑事さん、わたしが金田さんにお出ししたお礼の手紙、いったいどなたから手に入れられましたか？」

若い刑事が音を立てて椅子から立ち上がり、志津の前のテーブルをドンと叩いた。

「奥さんは質問する立場にないの！」

「たとえば現在は独身だとしても前の奥さん、急を聞いて駆け付けた彼のお母さま、あるいは妹さん……」志津は戦いが始まっていることを知った、誰だかは知らないがよその女との間で。「それとも、四月二十四日の日、彼の車の助手席にいた女の方……」

羽月刑事がピクリと目尻を動かしたあとで若い刑事を制して元どおりに坐らせた。

「いいでしょう、あなたが上品なだけの奥様でないことは納得しました」

「その方の犯行という見方はなさらない」

「ええ、彼女は妊娠六カ月、その子はむろん被害者の子だ。しかも彼女の年齢は三十、僕らの感覚からいえば結婚前の女性としては一杯一杯の立場

に立たされている。そういう女性が相手の男をあんなふうに置き去りにしますかね！」

「でも事故はあり得るでしょ、彼女が運転して

の。現実にわたしも脱輪したくらい」

「彼女は無免許だ！ それだけじゃない、車のハンドルすら握ったことがないんです」

「なぜ言い切れるんです、そこまで」

「複数の人がそう言い切ったからです。いいですか奥さん、七月四日、あの車の運転席にいたのはあなただ、僕は必ずあなたのその、きれいな顔に似合わない太たいほどの自信を突き崩してみせすからね」

「夫に連絡していただけませんか」

「来てくれるかな、こんな事件起こして」

若い刑事がこれ見よがしに首を傾げた。

「弁護士をつけてくれます、きっと」

志津は情けなさで、さすがに目頭が熱くなってきた。「ああ、そうでした、その妊婦さんにあなたを確認してもらいました。椿ラインでの被害者との出会いと万葉公園でのデートの相手がまさに

あなたであることを。いましがたのことです」

万葉公園の偶然の出会いのときも？ 彼女が身を隠しながら見ていたというのか。金田は仕事の途中だと言っていた。確かに平日の昼日中公園をうろついていて営業というのは辻褄が合わない。彼女とのデート中に志津の姿を見つけて追ってきたという方が自然かもしれない。その金田のあとをまた彼女がそっと追う、そしてあの二人の場面を……志津は頭が混乱してきた。

「会わせてください、その女性に。いったい何の恨みがあって」と立ち上がり、「まだ署内にいるんですよ」とドアに向った。

「奥さん！」

坐ったままで羽月刑事が志津の腕をつかんだ。その握力の強いことといったらない。志津は勢い余って刑事の足元へ転がり、スカートから太股が露になった。

「羽月さん、まずいですよ」と若い刑事が志津を抱き起こしにかかる。

「さわらないで！」

もう絶叫に近かった。

三

警察は任意のまままで終日取調べを続け、結局逮捕はしなかった。

「自信がないからじゃありませんよ、奥さん。逮捕してしまうといろいろな時間的な制約を受けるんでね、それだけです」とは羽月刑事の弁だ。こうも言った。「逃亡するとはこれっぽっちも思っていないせん。あなたはそんなやり方で自分の罪を認めるような人じゃないんです。これ、誉め言葉です」

志津は帰宅するとすぐ、巻き込まれた事件の概略を猛雄に話した。長い取調べの後である。常日頃猛雄から「お前は女のくせに理路整然としゃべりすぎる」と叱られているほどの志津だが、疲れで感情が絡み付き、お世辞にも分かりやすいとはいえない内容であった。しかし省略はあっても嘘はないと、そこは自分でも得心がいった。

何時間も前から鬱々と呑んでいたらしく、酔って漂うような目をしている猛雄が、話が終るのを待ちかねたように出してきた紙切れ……それには夫本人のみならず保証人の自署捺印までが済ませてあった。

いっそ警察の留置場で一夜を明かした方がよほど良かった。猛雄が差し出した離婚届を目の前にして志津は心底そう思った。一番信じて欲しい人に、一番信じて欲しいときに、この仕打ちはいかにも手酷い。

自慢の高級ソファアが、猛雄の貧乏揺すりに合わせて小さく上下している。

「ずっと前から用意なさってたのね」

「ああ……」とまたグラスを干した。

「絶好のチャンスというわけですか」

「まさか表彰状を期待しちやいないだろ？」

志津は、猛雄のグラスに七分目まで生のウイスキーを注ぎ、怒りの気持ちを表した。

「お義母さまはご存じなんですか」

「離婚届のことか、警察沙汰のことか」

「両方……」と志津は唇を噛んだ。

「離婚には拍手喝采だろう。事件の方は言えるか、病人だぞおふくろは！」

「すみません。でも事件は濡れ衣です」

志津は凜として言った。

「ああ、お前は事故現場から逃げ出せやしないうし、人を傷つけることもできやしない。ほかの男と寝るなんてこともな。まったくつまらない女さ」

「それがいけませんか」

志津の反撃に猛雄は目を剥いた。

「心では濡れて抱かれていたろ？ その男に。そうじゃないと、俺にじゃなくて自分に向っていいされるか？ 志津」

志津は黙った。猛雄の言うとおりで、それはそう感じた回数が少ないとか、実際に行動には移さなかったとか、そういうことで免罪されるものはなからう。

猛雄の酔眼が、内省している志津の心を覗き込むように一点に集中している。

「よせよ、反省なんて」と猛雄が急に笑いだした。

「心も愛も無しのセックスに走って、遊んでた俺のたわごとじゃないか。その挙げ句に女に子どもができて脅かされ、お前が今度のミスを犯さなきゃ、俺の方から別れてくださいって頭下げるところだった。笑えるだろ、え？ お前のバカ亭主も」

志津の中で何かが崩れていく音がした。

「あなたの子っていつ生れるんですか」

それだけは聞いておこうと思った。

「もう墮ろせない大きさ……で、いいか」

志津は思わず目をつぶった。外に子どもをつくったという事実よりも、その数ヶ月に及ぶ裏切りの日々がおぞましかった。

「若い人なんですよ」

そうなら自分の傷が浅いように思った。

「はっ……わたしに欠けてるのは若さだけと、そのほかには夫を奪われる要素はないと、そう言いたいわけだ、志津」と、何度も鼻先で笑った。

「何をしている人？ お仕事の関係からですか」
聞いてどうなるというのか。それでも、口が勝手に質問をしていた。

「仕事？ ああ、それもお前にはなかったっけな」

別に自分にはないものを探しているわけではない。猛雄の解釈は『語るに落ちる』ものであった。

「フーテンだよ、演劇やっているとか言ってたけどな」

志津は黙り込んだ。

猛雄がウイスキーを呷るとすぐに注いで元の量に戻す。アルコールで殺せればいいのだが。そんなバカなことすら頭をかすめた。

「おつかねえ。恐ろしい。女は男より一枚も二枚も上手よ、腹が突き出りやさらに頑丈でしたたかになる」

猛雄の手からグラスが滑り落ち、その後を追うように猛雄がソファからずり落ちた。

「志津、俺って汚いだろ……」

酔い潰れた夫に向かい志津は、ゆつくりと大きくうなずいた。その汚い男に養われている自分は何だろう。そう思った。

寝息を確かめた後で志津は、二階からタオルケットを運び、頭の中から足の裏までスッポリと包んでやった。猛雄が死体になったように見えた。

「いつまでも二人は、いつかは一人」

姑の口癖が現実になる。志津は、夫の偽の骸を横目にしながら、離婚届の空欄にペンを走らせた。

もう悲壮感も気負いもなかった。

翌朝、地元警察の車を回されるのを覚悟して志津は、観葉植物に水をやりたり花を活けたりしながらそのときが来るのを待った。

ご近所の目を避けては通れない。いよいよテレビでよくやっている、あの醜い晒し者になるのだ。志津が連行される姿を見たくなかったのか、猛雄は朝六時には家を出ている。志津は朝食も作らず、見送りもしなかった。たぶん猛雄は、この

まま志津が荷物をまとめて淡野家を去っていく日まで愛人のところに避難している気だ。車はガレージに置いてあった。これが思いやりなら嬉しいのだが、女の家には駐車スペースがないから乗っていけないのである。いまさらという気がしないでもないが、淡野猛雄は小さい男だと志津は思った。これで身も心も社会的にも独りになった。そんな気がした。

午前九時、羽月刑事から電話が入った。

刑事は、本署に出頭願いたい、車または電車で、一人で来てほしいと言い、ご婦人のことで支度もあるだろうから午後一時頃になつてもかまわないと付け加えた。声音の柔らかさといい、鄭重さといい、だいぶ風向きが変つてきている。

志津は、小田原で起こり得るあらゆる場合を想定して車に必要なものを載せながら、もしかしたら金田の意識が戻ったのではないかと思った。そうなら自分にかけてられた嫌疑は即座に晴れるし、警察も一転して低姿勢に出るのが道理だからだ。それにしても金田はどこに入院しているのか。で

できれば見舞いに行きたい。そうすればまた、金田の子を宿しているという問題の女性に会えるかもしれないのだ。別に、顔に唾しようとか、頬を殴ろうとか思っているわけではない。ただ、なぜ罪に陥れようとしたのか、そのわけが知りたい。何度も自分の中で確認した、望んでいるのはそれだけだ。

亀石峠を越えてまた伊豆スカイラインに入った。車はいい。「あら、お出かけ」と不躰に行き先を聞かれることもないし、照ったり降ったりの話題に何度も愛想笑いをふりまく必要もない。とくに今日は、今は、それが一番恐ろしい。拷問に近いことだから……。

「いやあ、奥さん暑いところをすみません、まったく梅雨だというのに三十度超えてるんですからねえ」

羽月刑事に招じ入れられた部屋は取調室ではなかった。詳しくは知る由もないが、インタビューから見ても重要人物が執務していそうな感じだ。

「もしかしたら金田さんの意識が……」と志津は後の言葉を濁した。弁解なら刑事から口火を切るべきだと思った。

「まだ事情聴取できる段階ではないんですが、医者のお話では手術は成功したし、昨日の夜、ちょうどあなたを帰した直後ぐらいになるでしょうか、目も開けたということで、あとは時間の問題でしょう」

案の定だった。

志津はホーツと大きなため息をついた。犯していない罪は誰が何と言おうと犯していないのだが、その証明をしろと言われれば困難を極める。素人でも唯一それができるのが現場不在証明、つまりアリバイなのだが今回の場合、志津にはそれが無かった。金田にこのまま死なれでもしたら、志津は孤立無援のまま途方に暮れたに違いない。「まさに急転直下なんです……」と刑事が口籠もった。

「わたしの容疑が晴れたのならそうおっしゃってください、あなたがたもお仕事で取調べをなさっ

たわけですし」

早くそれを聞きたい。そして金田がいる病院の名前も。

「じつは、被害者が助かるということを病院から聞いた藤原水絵が、あ、例の脱輪の際金田さんの車の助手席にいた女性です」

「ミズエさん……」

志津は、あの脱輪した日、助手席の女がなぜリクライニングを倒していたかを訝った。自分がその女なら、恋人がほかの女を助けている、その光景自体を監視の対象にする。目を離せるわけがないのだ。

「ろくに寝ないで悩んだ末なんでしょう、明け方近くに署に来ましてね、すみません、ごめんさいの連発だったそうなんです。呼ばれて来てみると、彼女、今度は自分がやった、あなたはではないと。要するに虚偽告訴を自白したというわけなんですが」

刑事も内心忸怩たるものがあるのであろう、自然に頭を下げている。

「でも、なぜまたそんなことを」

「それが、頑として言わないんですよ、あなたに会わせてくれたら言うの一点張りです。ま、しよせん僕らには分かりませんがね、今どきの若い女ってやつは」

「あの、わたしはかまいませんが」

警察として許可できるのなら異存はない。

「僕らがいるんで、危険はないと思いますが、なにごん妊婦で、それでなくても情緒不安定なもので」と羽月刑事は頭を搔いた。

「会うの、ミズエさんと二人だけにしていただけませんか」

そうでなければ、本音は吐かないのではない。志津は女が求めているものが、おぼろげながら分かってきた。

「隣室で傍聴と録音をさせていただき、ドアのすぐ外に署員を二名配置して万一に備える」という条件で、異例の許可が下りたのは三十分後のことだった。

四

取調室のドアを開けると、隈をつくり、そのうえ泣き腫らした目をした、小作りな女の顔が真っ先に目に飛び込んできた。髪の毛の色を抜いている、見た目を若くしている。

志津は会釈をしたついでに自分の今日の服装を一瞥してみた。車で来たことがわざわざいしたかもしれない。取調室で転んだときにスカート姿で惨めだったことから、きょうはパンツスタイルで来ている。足の長さもろに出るのは若い人の前では少々辛いものがあるのだ。

近くで志津を見るのは初めてのはずで案の定、水絵は急に目を凝らし、志津の全身を舐めるように見ている。

志津は、椅子に腰掛けることで点検される対象からやっとの思いで下半身を外した。

言葉というものは思ったより不便なものだと志津は、二分を超えそうな重苦しい沈黙の中でそう思った。

「なにをしに来たの」

水絵がようやく口火を切った。

「刑事さんはあなたが希望したと」

「そうじゃなくて！ どんなバカ面な女か見にきたの？ 面会を承知した理由よ」

「聞きたいことがたくさんあって……」

「あたしがあんたの立場なら絶対会わない」

「なぜ、の部分を知らずに終らせることができないから」

「殺したくなるからよ！」

言葉の激しさに志津は全身を震わせた。

「やってないのに。畏にはめようとした相手なんだよ、あたしは。なんで張本人を目の前にして、そんなに優しい声で話ができるのさあ、信じられない」

「逆に教えて水絵さん、なぜわたしを仇みたいに思っているの」

見ず知らずの十も歳の違う女性から、激しく憎悪されるほどの何かを自分が持っていること自体信じられないのだ。

「そんなことも分らないの。俊一の心を奪ったからに決まってるじゃない」

水絵によれば、金田と水絵の間の亀裂と不幸は全て、あの日金田が脱輪した志津を助けたことに端を発しているという。淡泊に現場を去ってしまったことを悔いた金田は、礼状が来てからというもの、こごめの湯の休館日明けの偶数日は、朝から万葉公園をうろついていたらしい。会いたいといっっては期待を弾ませ、会えなかったといっっては次回を指折り数えて待つ金田の姿が、水絵の目にもどのように映ったかは想像がつく。「いっそ電話をして会ったら」と皮肉を言うと、「バカ、偶然再会するから詩的なんだ。お前みたいながさつな女にやわかんねえよ、黙ってる」と一蹴されたという。

「あたしとのデートなんか、いつも面倒臭そうにしている俊一がよ、頭にきちやう」

「ゲームよ、きつと、彼の中ではね」

志津はそんな気がしてきた。

「違うわ、あんたに憧れたのよ。俊一、ものしり

だけど文学とか短歌なんか興味なかった。それが、手紙を見てからたくさん本買い込んできて、真剣に読んで。あたしのために、あんなに真剣になつてくれたことなんて一度もない！」

水絵によると、不安が募つたらしい。入籍はもちろん、金田の両親への紹介もまだだったのだ。おなかの子は四カ月をとうに過ぎて日々大きくなっていく。そういえばあの日から一度もドライブに連れていってくれない。最初はおなかの子を氣遣つてと思つていた水絵もついには違つと氣づき七月四日、金田にねだつて富士五湖行きを承諾させた。しかし大観山を越えて芦ノ湖へ下る辺りで水絵は腹痛に襲われる。金田は腹を立てて元来た路を引き返したのだが……椿ラインを下る途中、水絵は下痢の兆候を感じて車を降り道端の草むらに姿を隠した。水絵が戻るとなぜか金田は助手席に座っていたという。しかも志津からもらつた葉をじつと見つめながら……

「あたしのことなんか、ドライブしてる間中、ぜんぜん考えてなかったんだ」

水絵はそう言うと、その後の二人の会話を、涙をまじえながら再現してみせた。

「腹痛だの下痢だの野グソだの、最低だなあお前は。俺はもうやだからこの先はお前運転しろ」

「冗談でしょ、猛雄」

「ほらあ早く。大丈夫だよ、オートマチックはバカでも扱える。だいいち下りじゃねえか、ブレーキだけ踏んでりゃうちに着けらあ」

「あたし、免許無いから」

「じゃあ、何があるんだよ、お前に。あーあ、たまには志津さんみたいな人に運転してもらって助手席から横顔見つめていたいよなあ、ほんと」

「くやしかった。おなかの子は気になったけど、死んでもいいって思ったくらい。もしかしたら俊一、流産ねらいかなって、そこまで疑った」

思い出すだけでも哀しい言葉だったのだろう。水絵の目から大粒の涙が落ちた。

「それならやってやる。死ぬんならおなかの子も

いれて三人一緒だって、そう思ってた」

無茶だ。生まれて初めてハンドルを握ってカーブの多い急坂を無事に運転できるくらいなら、自動車教習所など一ヶ所も要らないに違いない。

「シートベルトは？」と志津は聞いた。装着していれば頭部損傷は考えにくい。

「あたしはしたわ、窮屈だったけど、猛雄がしろって」

「彼は、しなかった……」

「いつもよ、きらいみたい」

志津はそこまで聞いて目をつぶった。カーブを曲がりきれずガードレールに激突するシーンが見えた。

「あんたが悪いのよ、幸せだった俊一とあたしの間に入り込んで、かき回して、メチャメチャにしてえ！」

水絵が急に物を投げつける真似をした。

「わたしはとりあえず悪者でいいわ。でもね、わたしどうしても不思議なの。あなたなぜ彼を助けようとしなかったの、なぜ救急車を呼ぼうとしな

かったの、彼が好きだったら、いえ、おなかの子が彼の子に間違いないならパパになる人をなぜ見捨てたの」

「俊一、予想以上の出血で頭も顔も血だらけ、あれ見たら誰だって死んだって思うわ！」

「そう思ったとしましょう。じゃあ、なぜ愛してた彼の死体を残して逃げたの、変じゃない、矛盾じゃない？」

「ここが事件の核心だと志津は思っている。

「あんたが運転してた……」

「え？」

「あんたが運転してたのにあたしがそこにいたら変でしょ」

「その場で、すぐにそれを思いついたとでも言うの、あなた。恐くて逃げて、あとで自分とその子を護るために、じゃなくて？」

「そうよ、現場でよ、悪い？」

志津の身体に戦慄が走った。

「なによ、その顔。それって恵まれた人のものよね。いい？ 聞いて」と水絵は続けた。

事故原因が水絵の無免許運転で金田が死んだとしたら自分は罪に問われ、どこからも救いの手はない。たとえ金田が生命保険に入っていたとしても、妻でもなく、加えて保険事故を引き起こした当の水絵におりる金など一円もない。だとしたら生れてくる子はいったいどうなるのか、と。

謀って示談に持ち込む計画だったらしい。

「わたしにお金があるとでも思ってた？」

「たとえあんたに無くてもあの旦那にはあるでしょ？ 車だって国産だけど高級車だし世間体を気にするお金持ちなら可能性は高いと踏んだのよ」

会ったこともないのに「あの旦那」はない。

「残念ね、わたしの元夫はわたしを護るためにお金なんか払わないわ、絶対」

哀しいけれど今では確信に近い。

「元夫？」と水絵が聞きとがめた。

「離婚されたの、わたし」

半ば微笑しながら志津はさらりと言った。

「あはは」と笑いを発した水絵は更に苦しがるほどにしやくりあげ始めた。

志津は黙ってそれを見ていた。大笑いしている者は他にもいるはず……猛雄、姑、猛雄の愛人……そして自分自身。

「それでも許すの、あたしを。そんなふうにお上品ぶって。お人好し、バカみたい」と言いながら、水絵は更に笑い続けた。

おなかの子は男の子かもしれないと、志津は、水絵の攻撃的な態度からそんなことを思った。

いずれにしても児戯に等しい粗雑な計画だったことは確かである。しかしその児戯がもの見事に志津の偽りの安定を破壊し去ったのだ。これを不幸とみるか、僥倖とみるかはこれからの自分の生き方にかかっている、と志津は思った。

羽月刑事によれば、金田の快復は比較的早いのではないかとのこと、なよりの朗報だった。ただ、水絵の話の聞いているうちに見舞う気持ちは喪失した。志津は自分で美化した金田に心を奪われていたのだ。そうであればなおさら、水絵のためにも二度と金田の前に立つべきではなからう。

志津は結論を出した後で深呼吸をした。

「ねえ、水絵さん」

「何、あらたまつて」と水絵は構えた。

「少なくともわたし、あなたにかなわないうものが三つあるわ」

「こんどは同情からヨイショかさ」

志津は笑顔をつくつて首を振った。

「まず、あなたは子どもができたわ。女なら当たり前だと思わないでね。わたしは出来なかつたから離婚されたの。今度のことが直接の原因じゃないわ。だから念のために言いますけど、気にしないで。二つ目は、わたしより九つも若いわ。同じやり直すにしてもこの差は大きいわ。三つ目ね、あなたは命懸けで必死に生きてるわ。わたしなんか足元にも及ばない真剣さで」

金田が意識を戻したこと知って全てを自白した心理にもそれが表れていると思った。水絵は嘘が警察にばれることを恐れたというより、その嘘が金田の逆鱗に触れるであろうことを、誰よりもよく知っていたのだ。

善悪はこの際措いておこう。志津は思う、水絵

が金田を愛するように強く、自分は猛雄を愛したことがあるだろうか。同様に、猛雄を命懸けで自分のもとに引き寄せようとしたことがあるだろうか、と。

志津は女として、目の前の水絵に大いに負けているような気がした。

「余裕よね」

志津の言葉を皮肉にとる姿勢は相変わらずだが、心なしか表情が和んできた。

「虚勢よ、精一杯の」

本音だった。

水絵が大きなため息をついた後で唇を何度も噛んだ。「あなたの手紙ぐらくらいやさしかったものはないわ。どうしたらあんなきれいな字書けるの、あんなふうにまとめられるの……俊一が夢中になるの、無理ないわ……」

「水絵さん……」

「もつとおどろいたのは俊一が、さらさらって、あんたに手紙を書いたことよ」

簡潔で、しかもユーモアがあって、志津も感心

した憶えがある。

「あたしには一回もくれたことない……そりやそうよね、バカなあたしに合わせてくれてたってことでしょ……」

水絵の瞳と睫毛がいつべんに濡れた。

戯れに引用した短歌、行間に淡い恋心や憧憬をにじませた文章、確かに最初から最後まで、自分がいかに出来る女であるかを誇示し続けた手紙だったような気がする。

志津は、自分の一通の手紙が一組の男女に与えた苦痛を思つて萎えた。

黙つて涙を落とし続ける水絵に会釈をして志津は、ゆつくりと廊下に出た。

「いろいろな意味でご面倒をかけました」と、隣室から出てきた羽月刑事が言った。

「あの、嘆願書を書かせてくださいませか、虚偽告訴の方で少しはお役に立つと思いますので」
自分にも罪がある。志津は本気でそう思い始めていた。

羽月刑事が瞬きをした後、薄くなった髪を丸く

と見せて礼を言った。

五

家中の掃除と自分の荷物の搬出に二日を要した。予想どおり猛雄は寄り付かず、電話一本よこさなかつた。

淡野家を去る朝、志津は入念に紅を引いた。その行為は、志津が猛雄からの分離するための通過儀礼にもなつた。出なおすなら、形からというつもりだったが、これが予想外に心を高揚させた。鏡の中の自分が昨日までの自分を捨てていくのが分かる。そのための用意も周到にした。肩の少し下まである髪を丸めて襟足を出すように束ねていたのを止め、前日美容院で一氣に短くした。その足で、明るい色のワンピース、それに合うヒール、そしてバッグと、たて続けに買物も済ませている。もちろん猛雄のカードを使った。

学生時代のボーイフレンドに、つまり猛雄の恋敵だった男に二十年ぶりに連絡をとり、弁護士を

紹介してもらつた。猛雄の愛人には、意地でも慰謝料などは請求しないが、猛雄にはきちんと財産分与をしてもらう氣でいる。自分よりもその彼の方が猛雄憎しで燃えていたのが、何となく救われるようで嬉しい。就職が決まるまでの一時的な住居を手配してくれたのも彼だった。

今日からは文字通り独りで生きていくことになる。遅ればせながら、戦う女に変身していかなくては、と思う志津だった。

家を出て駅に向う。

少し熱を帯びた風が、沿道の垣に咲くノウゼンカズラの黄赤色を揺らしていた。数十輪の花が一斉に、別れを惜しむように首を横に振る。

「元氣でね」

志津は見送りに応えるように、花に向つて小さく手を振つた。

途中で隣人とすれ違つた。

その婦人は志津と分かる、大げさに目を剥き、掌で口を覆つた。そして一呼吸おいてからこ

う言った。「いったいどうなされたの？」

婦人の驚きは日頃の自分が地味過ぎた証拠でもある。

志津は、微笑しながらくると体を一回りさせて「主人に追い出されたので、少し派手なお仕事に就こうと思ひまして」と言った。どうとるかは相手の自由だ。

「そうよ、まだお若いしおきれいだし、ねえ。ご主人ばかり若い娘といい思ひさせるって手はないわよ」

離婚されたとは受け取らなかったようだが、なぜ隣人が猛雄の浮気相手を知っているのかと気になった。

「若い娘？」

「そうよお、この間茶髪の子とこの先の路地で顔と顔をくつつけるようにしてヒソヒソ……あらいやだわ、わたししたら余計なことを。ほほほ、ごめんください」と婦人は口を掌で覆ってお辞儀をした。

「……茶髪？」

まさか、と婦人の後姿を見送りながら、志津は眉間に皺を寄せた。その女が水絵だとしたら……。その日が事故の後だとしたら……「わたしがやった事故だと言つて猛雄を強請つた？ 確かに住所は金田に出した礼状から簡単にわかる。だとすれば、もしかしたら」警察から戻つて話す以前に猛雄は事情を知っていた、だから離婚届が用意できた……

「あの……」と志津は婦人を呼び止めようとして、すぐに次の言葉を飲み込んだ。

「前だけを見るんだったわ」

確かめて今更何がどうなるというのだろう。

せつかく幕切れを綺麗にしたのに、より汚い愛憎劇で再演したくはない。

志津は、大きく息を吸つてから婦人に背を向けた。

しかし、足がその場に貼り付いたように動かない。

朝からずっと吹いていた爽やかな風が、志津の心の中でピタリと止んだ。

「前：事故の前？　水絵と猛雄が事故の前から」

志津は両手で口を覆い、意識的に何度も首を振った。考えるだけでも恐ろしいことだ。しかし：金田に再会した日は猛雄に送り出されたようなもの。金田も万葉公園で営業と言っていたがあれは変だ。まだある。浮気相手は猛雄によればもう堕ろせない時期、水絵も刑事によれば六カ月、胎児の状態は一致している。単なる偶然だろうか。

志津は、取調室での水絵との面談にまで記憶を遡らせた。そこには演技や嘘とは無縁の、剥出しの女が居た。そのはずだった。

「俊一、予想以上の出血で」、さらに嗚呼「あ的那……」

志津は膝の力が抜けてしゃがみ込んだ。

「フーテンだよ、演劇やっているとか言ってたけどな」

猛雄の声のしかかるように志津を襲った。